

図1. 共分散構造分析に用いた変数

	潜在変数	因子 負荷量	観測変数
育児困難	否定的感情認知 (0.79)	0.65	お子さんのやっていることで、どうしても理解に苦しむことがありますか
		0.66	必要とも思われないようなことをお子さんは求めすぎていると感じることはありますか
		0.68	あなたがお子さんにやってあげていることで、報われないと感じることがありますか
	活動制限認知 (0.64)	0.82	お子さんの世話が自分で責任を負わなければならない家事等の仕事と比べて、重荷になっていると感じることがありますか
		0.74	お子さんの世話のために、かなり自由が制限されていると感じることがありますか
		0.68	お子さんがいるために、趣味や学習、その他の社会活動などに支障をきたしていると感じることがありますか
支援ネット	情緒的	0.86	心配事や悩み事を親身になって聴いてくれる
		0.84	あなたの気持ちを察して思いやってくれる
		0.61	趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる
		0.63	子どもの発達やしつけについて、適切な助言をしてくれる
	手段的	0.82	留守を頼める
		0.83	買い物に行くぐらいの間、お子さんをみてくれる
		0.7	お子さんの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる
特性的自己効力感 関係	行動完了	0.67	初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける
		0.73	重要な目標を決めたら最後まで成し遂げる
		0.65	自分が立てた計画はうまくできる自信がある
	行動生起	0.8	人の集まりの中では、うまく振舞える
		0.76	私は自分から友達を作るのがうまい
		0.55	思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できる
不適な養育	不適切な養育	0.56	お子さんを大きな声で叱ることはありますか
		0.56	お子さんが泣いていても放っておくことがありますか
		0.67	お子さんが傷つくことを言うことはありますか

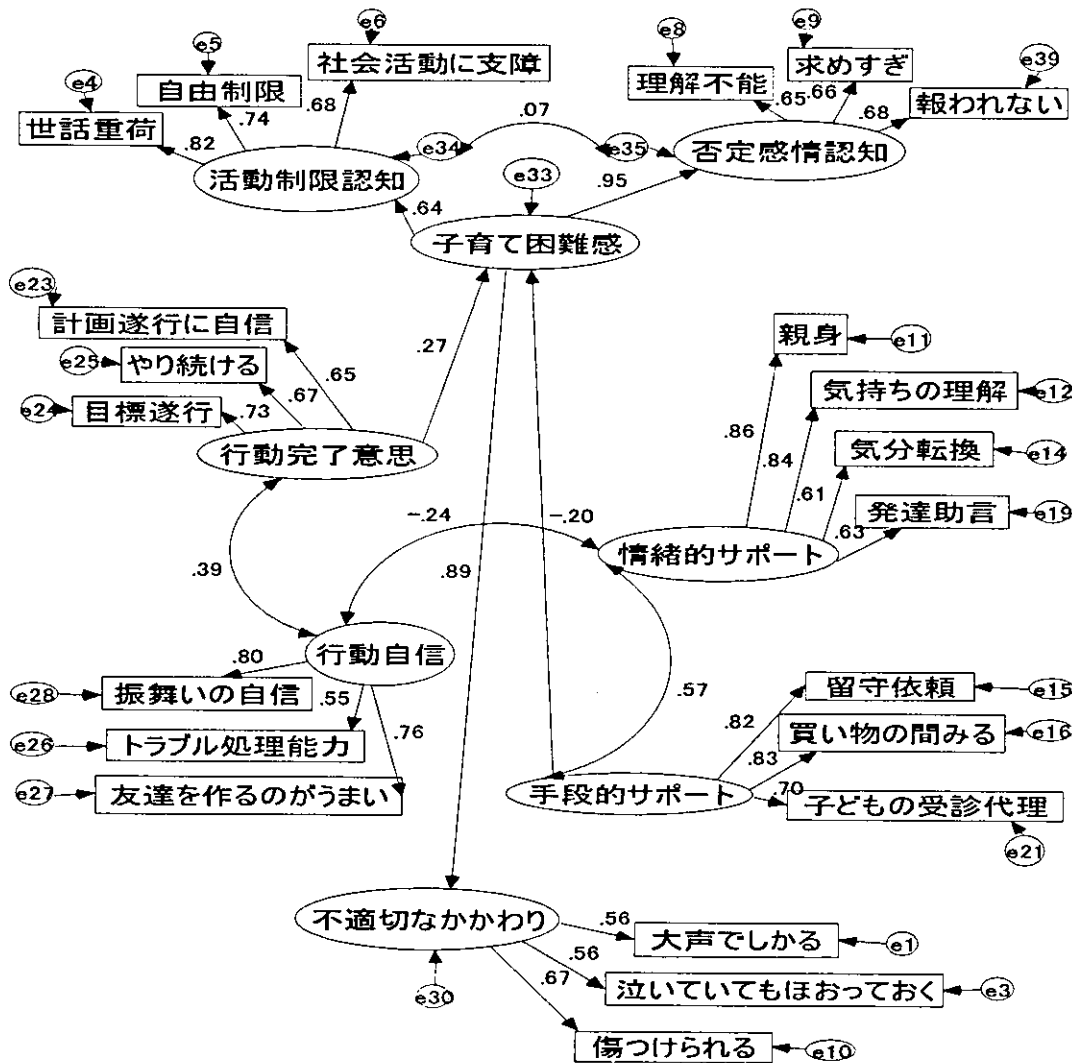
モデルを詳しく評価すると、潜在変数が個々の観測変数に与えている影響指標は図1・図2に示す通り、非常に高い指標を示している。制約を加えていない指標すべて、 $p=0.000$ と1%水準で統計的に有意である。潜在変数は個々の観測変数を十分規定していることがわかる。

次に各潜在変数間の関係を見ると、因果関係を表す係数も相関を表す係数もt検定の結果、1%水準で有意であった。

内容は、先に述べた不適切な養育予防モデル仮説に基づいて検証を重ね、作成してきたが、以下のような結果となった。

育児負担感は、支援的ネットワークとの関連では、「手段的サポート」から負の影響を受けており、特性的自己効力感に関する項目との関連では、「行動完了しようとする意思」から正の影響を受けている。「手段的サポート」があれば、育児負担感を下げることが可能であるといえる。そして、「行動完了しようとする意思」が強い場合、反対に育児負担感が高まることになる。いずれも、大きな値ではないが、関連があると言える。

図2. 育児負担感と不適切な養育のモデル



注) χ^2 値は、733.155 (df=201, p=0.000)

そして、「不適切な養育」は、育児負担感から 0.89 と大きな値で影響を受けていた。

また、育児負担感に直接関連が見られなかった「行動生起しようとする自信」は、「行動完了しようとする意思」との相関が 0.39、情緒的サポートとの相関が -0.24 であった。また、情緒的サポートも直接関連が見られなかったが、道具的サポートとの相関は 0.57 と高かった。

「行動生起しようとする自信」の高い人は、「行動完了しようとする意思」があるが、「情緒的サポート」を持っていないといえる。そして、「情緒的サポート」を持っていれば持っているほど「手段的サポート」も持っていることになる。つまり、「行動生起しようとする自信」の高い人は、

孤立を高める状況にあることも考えられる。

子育て仲間や子育てサークルや育児体験との関連をモデルの中に入れて考えられないか検討したが、いずれも育児負担感に与える影響としての指標は、0.01~0.09という小さな値であったために、今回はモデルからは削除した。そして、これらの項目については、以下の2)において細かく検討することにした。しかし、統計的に育児負担感を説明するのに有意であった項目として、子育てサークル(偏回帰係数=-0.07)、経済状況(偏回帰係数=0.09)が存在したことを記しておく。

要するに、先に述べた不適切な養育予防モデル仮説から、検証できたのは、『育児負担感は、不適切な養育に大きな影響を与えており、その軽減には、ソーシャルサポートのなかの手段的サポートが有益である』という点であった。新たに『「行動完了しようとする意思」が強い場合、反対に育児負担感が高まる』という結果が見られた。そして、残念ながら、始めに立てた仮説の後半の『子育て仲間や子育てサークルなどの個人的サポートでなく集団的サポートが有効な役割を果たす』という点については実証できる有効な結果が得られなかった。

(2) 子育て状況に関する項目と各因子の関連の検討 (注:表については、文末にも掲載)

1) 子育て状況と育児負担感の関連

①子育て仲間と育児負担感の関連

3歳、1歳半では、育児負担感において子育て仲間がいるか否かは、有意な差は見られなかったが、10ヶ月(df=957, $t = -4.929, p = .000$)、4ヶ月(df=862, $t = -3.727, p = .000$)では、有意な差が見られた。育児負担感において、乳児の親の場合は、「子育て仲間がいる」と答えた場合の方が「いない」と答えた場合に比べて子育て負担感が低い傾向であった(表C-2-1)。

②子育てサークルと育児負担感の関連

子育てサークルについては、10ヶ月、4ヶ月では有意ではないが、3歳(df=2/1341, $F = 4.023, p = .018$)、1歳半(df=2/1197, $F = 4.056, p = .018$)において差が有意であった。

項目間を詳しく確認すると、3歳では、「現在参加している」群と「参加したことはない」群とに関連があり($p = 0.019$)、1歳半では「過去に参加している」群と「参加したことはない」群において関連があり($p = 0.025$)、いずれも参加したことがない群の方が育児負担感の値が低い(表C-2-2)。幼児において、子育てサークルと育児負担感の関連があり、育児負担感を持つ傾向にある方が子育てサークルを利用している傾向がある結果であった。このことは、本研究の第1次、第2次調査の結果にも見られていた。

③育児体験と育児負担感の関連

育児体験については、すべての年齢について差が有意であった。どの年齢においても自分が子どものころに「育児体験をしている」群の方が、「していない」群よりも、育児負担感が低かった(表C-2-3)。

④早期教育と育児負担感の関連

この項目は、習い事を尋ねているが、3歳(df=5/1338, $F = 2.271, p = .045$)、1歳半(df=4/1195, F

=3.402, p=.009) にのみ質問した項目である。いずれの年齢においても差が有意であった、しかし、回答の数が3つになると急激に下がり、そのことを考慮しても「習い事なし」から「習い事2つ」までを分析対象と考える。その範囲内では習い事を多くしている群の方が、育児負担感が高い傾向にあるといえる（表 C-2-4）。

⑤仕事と育児負担感の関連

仕事については、3歳 (df=4/1398, F=2.434, p=.046) と10ヶ月 (df=4/954, F=2.781, p=.026) において差が有意であった。しかし、項目ごとに細かく見ていくと、3歳では有意差がなく、10ヶ月でも差に関連があったのは「フルタイム」群と「仕事をしていない」群（回答「いいえ」）のみであり (p=0.025)、「仕事をしていない」群に比べて「フルタイム」群は子育て負担感が低かった（表 C-2-5）。

⑥経済状況と育児負担感の関連

経済状況については、各年齢において差が有意であった。「経済的に苦しい」生活を送っていると感じている群の方が「安定している」と答えた群よりも育児負担感が高い。年齢的には、3歳の「苦しい」と答えた群のポイントが一番高く、子どもの年齢が高くなるほど苦しい状況であるといえる（表 C-2-6）。

2) 子育て状況と不適切な養育の関連

10ヶ月、4ヶ月については因子分析の段階で共通性が低く、項目を減らしたために虐待項目として入れた項目がすべて残らず、因子としてまとまらなかった。そのため、本分析は不適切と考え行っていない。以下、3歳、1歳半において、差が有意であった項目についてあげる。

①育児体験と不適切な養育の関連

育児体験について1歳半のみが、回答の差が有意であったが (df=2/1197, F=3.988, p=.019)、細かい質問項目間を確認すると有意差が見られなかった（表 C-3-1）。

②早期教育と不適切な養育の関連

早期教育について3歳のみ回答の差が有意であった (df=5/1338, F=3.270, p=.046)。しかし、細かい質問項目間を確認すると、回答数と平均値が極端に「習い事3つ」で下がっているために差が有意になっていると考え、不適切と判断する（表 C-3-2）。

③仕事と不適切な養育の関連

仕事については3歳 (df=4/1339, F=3.385, p=.046) において、就労形態の違いが、不適切な養育に何らかの影響を与えているものと考えられる。細かく項目ごとに見ていくと「フルタイム」と「内職」と「仕事をしていない」においての差が有意であり、「パートタイム」が最も不適切な養育へのポイントは低く、「内職」が最も高い。家のなかにおいて仕事を行う内職により、周りにいる子どもが負担になっている可能性が考えられる（表 C-3-3）。

④経済状況と不適切な養育の関連

3歳 (df=2/1341, F=7.963, p=.000)、1歳半 (df=2/1197, F=11.022, p=.000) いずれも回答の差が有意であった。つまり、経済状況は不適切な養育に何らかの影響を与えている。「経済的に苦

しい」と感じている群の方が不適切な養育の傾向に陥りやすい結果であった（表C-3-4）。

3) 初産婦と経産婦の比較

以下、各因子・各項目について、初産婦と経産婦の間に差があるのか検討を行う。差が有意であった項目について記述する。

① 因子分析によって明らかになった各因子における経産婦・初産婦による比較

育児負担感の因子である「否定的感情認知」において、1歳半では経産婦の方が高く（平均値：初産婦 1.3961, 経産婦 1.4874, $p=.001$ ）、10ヶ月（平均値：初産婦 1.5911, 経産婦 1.4674, $p=.000$ ）と4ヶ月（平均値：初産婦 1.5957, 経産婦 1.4091, $p=.000$ ）では初産婦の方が高かった。同じく、「活動制限認知」では1歳半（平均値：初産婦 1.9946, 経産婦 2.0921, $p=.010$ ）において経産婦の方が高かった。

サポート因子では、10ヶ月において「情緒的サポート」（平均値：初産婦 2.8870, 経産婦 3.0104, $p=.000$ ）、「手段的サポート」（平均値：初産婦 2.3531, 経産婦 2.4507, $p=.000$ ）含めて経産婦の方が高かった。4ヶ月においては独自で因子がでてきた「知識的サポート」（平均値：初産婦 2.6563, 経産婦 2.8584, $p=.001$ ）は経産婦の方が高かったが、「情緒的サポート」（平均値：初産婦 3.0390, 経産婦 2.9201, $p=.001$ ）は、初産婦の方が高かった。

特性的自己効力感に関連する「行動完了しようとする意思」において、3歳（平均値：初産婦 2.6080, 経産婦 2.5127, $p=.007$ ）は初産婦の方が高く、1歳半（平均値：初産婦 2.4797, 経産婦 2.5950, $p=.002$ ）、4ヶ月（ $p=.006$ 平均値：初産婦 2.5778, 経産婦 2.6728,）では経産婦の方が高かった。同じく、「行動生起しようとする自信」においては、3歳（平均値：初産婦 2.6080, 経産婦 2.5127, $p=.007$ ）では初産婦の方が高く、10ヶ月（平均値：初産婦 2.5737, 経産婦 2.6632, $p=.015$ ）では経産婦の方が高かった。

不適切な養育については、3歳（平均値：初産婦 2.6280, 経産婦 2.5465, $p=.033$ ）では初産婦の方が高く、1歳半（平均値：初産婦 2.1897, 経産婦 2.3166, $p=.001$ ）では経産婦の方が高い結果であった。

総合して、明らかに言えることは、育児負担感や乳児の場合、初産婦の方が感じやすく、幼児になると経産婦の方が感じやすい傾向にある。特性的自己効力感に関する項目は、年齢が低い時は、経産婦の方が高いが、3歳になると初産婦の方が高くなる傾向が見られた。第1子の経験が生かされて前向きに取り組めるのは、第2子以降が3歳くらいまでであることが考えられる。

② 育児体験等や仕事における比較

「子育て仲間がいる」か否かについては、10ヶ月（平均値：初産婦 1.7210, 経産婦 1.8055, $p=.002$ ）4ヶ月（平均値：初産婦 1.6167, 経産婦 1.7489, $p=.000$ ）において経産婦の方が高かった。「子育てサークルに参加しているか」否かについても、同じく、10ヶ月（平均値：初産婦 1.2433, 経産婦 1.3890, $p=.000$ ）、4ヶ月（平均値：初産婦 1.0833, 経産婦 1.3105, $p=.000$ ）において経産婦の方が高かった。

自分が子どもの頃の育児体験についても、1歳半（平均値：初産婦 1.5226, 経産婦 1.6734, $p=.000$ ）、4ヶ月（平均値：初産婦 1.5952, 経産婦 1.7443, $p=.004$ ）において経産婦の方が高かった。早期教育については、1歳半（平均値：初産婦 0.55, 経産婦 0.64, $p=.039$ ）において経産

婦の方が高かった。

仕事については、3歳は経産婦の方が高かった（平均値：初産婦 1.91，経産婦 2.23， $p=0.000$ ）。
 経済状況については、3歳（平均値：初産婦 1.67，経産婦 1.79， $p=0.005$ ）、1歳半（平均値：初産婦 1.70，経産婦 1.81， $p=0.002$ ）において経産婦の方が高かった。

「子育て仲間」や「子育てサークル」など子どもに関する交流は、乳児においては差が有意で経産婦の方が、よく行われていることがわかった。また、経済的には幼児において差が有意で、当然かもしれないが、経産婦の方が「苦しい」と感じていた。その結果として、3歳では、仕事へのポイントも初産婦より経産婦の方が高かった。

表 C-4-1

因子	年齢	検定	発達	平均値	因子	年齢	検定	発達	平均値
否定的感情認知	10ヶ月	df=2/898, F=6.437 p=.002	良好	1.4414	手段的サポート	10ヶ月	df=2/898, F=8.693 p=.000	良好	2.5573
			普通	1.5170				普通	2.3572
			不良	1.5967				不良	2.3160
活動制限認知	1歳半	df=2/1104, F=6.921, p=.001	良好	1.8817	行動完了しようとする意思	3歳	df=2/1190, F=12.356 p=.000	良好	2.4090
			普通	2.0816				普通	2.5325
			不良	2.1066				不良	2.6842
	10ヶ月	df=2/898, F=7.050 p=.001	良好	1.9508	1歳半	df=2/1104 F=12.651 p=.000	良好	2.4573	
			普通	2.0956			普通	2.5061	
			不良	2.1892			不良	2.6467	
	4ヶ月	df=2/757 F=3.535 p=.030	良好	1.9712	10ヶ月	df=2/898, F=8.071 p=.000	良好	2.3452	
			普通	2.0484			普通	2.5146	
			不良	2.1890			不良	2.6050	
情緒的サポート	3歳	df=2/1190 F=20.182 p=.000	良好	3.1635	4ヶ月	df=2/757 F=4.173 p=.016	良好	2.5453	
			普通	3.0121			普通	2.6336	
			不良	2.7960			不良	2.7083	
	1歳半	df=2/1104 F=12.651 p=.000	良好	3.0801	行動生起しようとする自信	3歳	df=2/1190, F=12.356 p=.000	良好	2.4090
			普通	2.9979				普通	2.5325
			不良	2.7769				不良	2.6842
10ヶ月	df=2/898, F=9.825, p=.000	良好	3.1255	1歳半	df=2/1104 F=18.391 p=.000	良好	2.6463		
		普通	2.9135			普通	2.7733		
		不良	2.8501			不良	3.0657		
手段的サポート	3歳	df=2/1190 F=18.14 p=.000	良好	2.5321	10ヶ月	df=2/898, F=12.106 p=.000	良好	2.3452	
			普通	2.4318			普通	2.5146	
			不良	2.2193			不良	2.6050	
	1歳半	df=2/1104 F=15.668 p=.000	良好	2.4598					
			普通	2.3865					
			不良	2.1431					

4) 発達による比較

以下、各因子・各項目について、発達によって差があるのか検討を行う。差が有意であった項目について記述する。

①因子分析によって明らかになった各因子における発達の違いによる比較（表C-4-1）

育児負担感の因子である「否定的感情認知」は、10ヶ月において発達不良群の方が高かった。同じく、「活動制限認知」では1歳半、10ヶ月、4ヶ月において発達不良群の方が高かった。

サポート因子では、「情緒的サポート」、「手段的サポート」含めて3歳、1歳半、10ヶ月において発達良好群が高かった。

特性的自己効力感に関連する「行動完了しようとする意思」において、各年齢で発達不良群の方が高かった。同じく、「行動生起しようとする自信」においても、3歳、1歳半、10ヶ月において発達不良群の方が高かった。

総合して、明らかに言えることは、育児負担感は乳児の場合、発達の違いにより感じやすい。サポートについては、4ヶ月を除いて発達良好群が高く、本来は発達不良群が必要であるが反対の状況である。そのことと関連するかのよう、特性的自己効力感に関連する項目について発達不良群の方が各年齢で高く、一人で頑張りがちな傾向がうかがえる。

②育児体験等や仕事における比較（表C-4-2）。

子育て仲間がいるか否か、そして自分が子どもの頃の育児体験については、各年齢において発達良好群の方が高かった。子育て仲間、育児体験は発達に有効であると考えられる。仕事や経済状況については分析の意味がないと考え行っていない。

表C-4-2

因子	年齢	検定	発達	平均値	因子	年齢	検定	発達	平均値
子育て仲間	3歳	df=2/1190 F=13.390 p=.000	良好	1.88	育児体験	3歳	df=2/1190, F=4.005 p=.018	良好	1.73
			普通	1.80				普通	1.66
			不良	1.70				不良	1.55
	1歳半	df=2/1104, F=8.740 p=.000	良好	1.8232		1歳半	df=2/1104 F=9.844 p=.000	良好	1.7988
			普通	1.7967				普通	1.5994
			不良	1.6825				不良	1.4745
	10ヶ月	df=2/898, F=7.587 p=.001	良好	1.8536		10ヶ月	df=2/898, F=8.696 p=.000	良好	1.7657
			普通	1.7443				普通	1.6320
			不良	1.7072				不良	1.4586
	4ヶ月	df=2/757 F=3.368 p=.035	良好	1.7407		4ヶ月	df=2/757 F=4.370 p=.013	良好	1.7901
			普通	1.6912				普通	1.6452
			不良	1.6098				不良	1.5427

D. 考察

本調査では、仮説に基づいてモデルを作成し、そこで説明しきれなかった要因について細かく

検討してきた。そして、分析の手続きと結果を記述してきた。

不適切な養育予防モデルの仮説を立て、検証を繰り返したが、モデルとしてデータに基づいて実証できたのは、『育児負担感、不適切な養育に大きな影響を与えており、その軽減には、ソーシャルサポートのなかの手段的サポートが有益である』という点であった。新たに『「行動完了しようとする意思」が強い場合、育児負担感が高まる』という結果が得られた。この点については今後さらなる検討が必要であろう。今までに述べられてきたことも含めてモデルとして共分散構造分析によってまとめて提示することができたのは、意義があると思う。

その上で、今回の研究の限界と結果の考察を1) 不適切な養育に関連する要因、2) 予防的視点での検討、に沿って行う。1) については、①発生要因について、②特性的自己効力感との関連、③育児負担感の初産婦・経産婦の違いの分析という視点で行った。

まず、本調査の限界は、データ数は、実施現場の絶大な協力によって、かなり確保でき統計的に有意な結果を導きだすことができた。しかし、項目については表現の問題等から実施現場でのそのままの形で実行することが困難であった。このことは、標準化されている尺度が実際に子育て現場では使用しにくい実態として、今後の子育て現場にあった尺度開発の必要性があると思う。また、子育てサークルや子育て仲間などの今回モデルに投入したかったが、できなかった。なかには、「子育てサークル」や「経済状況」など統計的に有意であった項目もあり、質問の仕方、質問用紙の作成の仕方等今後の課題である。

1) 不適切な養育に関連する要因

Steele (1980) は、児童虐待発生条件として①自分が受けた虐待経験が心理的影響となる虐待傾向②何種類かの生活上のストレスが存在する危機③社会性の低さからくる資源の欠如④親が満足できないところのある子ども、をあげている(山野, 2003)。本調査においても、不適切な養育と関連が深かった育児負担感と、仕事、経済状況、孤立、発達に関連があることが確認できた。なおかつ、子どもの年齢による違い、初産婦・経産婦の違いも見られた。

内容を詳細に見ると、ここでいう孤立というのは、子育て仲間がいるか否かという項目や「行動を完了しようとする意思」や「行動生起しようとする自信」で判断した。Cの結果で説明してきた共分散構造分析によるモデルや項目間検定の結果、「行動を完了しようとする意思」や「行動生起しようとする自信」の項目が高いほど子どもへの要求水準が高かったり、サポートが得にくかったりしており、結果的に孤立が起きている状況があると考えられる。

Schneewind (1995) や金岡ら (2002) は、「特性的自己効力感の高さが子どもを養育し社会化を促進するという課題をうまく処理され、子どもや夫婦間の相互作用を機能させ、育児負担感を低減させる」「自己効力感の低さが否定的感情認知の変数の介在要因になっている可能性がある」という主張をしていたが、今回の結果は肯定していない。ただし、今回は特性的自己効力感の尺度から、そのまま使うことができなかつたためにはっきりとはいえない側面がある。しかし、自分の持つ達成意欲や自信が逆に思うようにならない子育てにおいては、プラスに働かずに育児負担感、つまり子育てしていく上で、より高いストレスを導き出す可能性もあると考えられる。

初産婦・経産婦の違いにおいても、金岡ら (2002) は、否定的感情認知は経産婦の方が高いという結果であったが、本調査では年齢に違いが見られ、乳児年齢では初産婦の方が高かった。1歳半になると経産婦の方が高くなり、活動制限認知も1歳半で経産婦の方が有意に高くなってい

た。今回の調査結果から、新たに、否定的感情認知の初産婦・経産婦の違いは子どもの年齢によって違う傾向があることがいえる。子どもの年齢が低い初産婦は、子どもの年齢から経験も浅く初めてで子どもがわからずに否定的感情になる傾向が経産婦よりあることが考えられる。

2) 予防的視点での検討

本調査の結果から、育児負担感を下げることが、不適切な養育を減少させることに関連すると考えられる。

作成した3歳のモデルから言えるように、情緒的サポートが強調されがちであるが、必要なのは具体的手段的サポートである。ファミリーサポートや家庭に入る保育ママ制度、病児保育が施行されているが非常に重要な役割を果たしていると思われる。そして、もう一步、制度実施における様々な制限の検討が必要かもしれない。

子育て支援の実施現場においても、専門職が話を共感的に聴くことが強調されがちであるが、セルフヘルプで具体的助け合いの輪を広げることへのサポートも検討すべきである。そのためには、専門職には主体的グループへの育成が望まれる。

上記、育児負担感を下げることが、不適切な養育の予防に繋がるという前提で子育て状況の細かい分析を行うと、乳児と幼児共通のものもあるが、年齢によって、違いがある項目も多かった。予防を考えると年齢によって違ったサポートを検討する必要がある。

まず、各年齢共通して見られたのは、育児体験が育児負担感を引き下げるのに有効であることだ。このことは、現在行われている体験学習の継続の必要性、単に触れ合うだけでなく世話のレベルまで実行を検討することが必要かと思われる。このことは、すでに第1調査、第2次調査におけるクロス集計によっても述べているが、項目間での分析でなく、今回は育児負担感などの潜在的な因子を考慮して分析を行ったことで、今までの結果をさらに科学的に強調するものとして意義があると考えられる。

年齢によって差が見られたのは、乳児では子育て仲間が有効で、幼児では育児負担感の高い方が子育てサークルを利用していることが明らかだった。また、幼児では早期教育への傾向が育児負担感を高めることと考えられる。子育てサークルに集まっている人は支援が不要であると言われるがちであるが、反対で育児負担感が高くサークルを利用しているという傾向がみられた。つまり、子育てサークル発定期とは、実態や機能が変化してきて、子育てサークルへの支援が必要なのではないかと考える。視点を大きく変える必要がある。

今後、さらに本調査の分析を進め、本調査結果を生かして主体性育成できる支援方法の検討、展開をしていきたいと考える。調査課題としては、不適切な養育予防モデル構築の試みを行ったが、さらに精緻化させる課題が残される。

付記:最後に、本調査の実施にあたって多大な理解と協力を下さった姫路市保健所・保健センターの皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

原田正文 (2002) 「子育て支援と NPO」 朱鷺書房。

原田正文ほか(2003) 「児童虐待発生要因の構造分析と地域における効果的予防法の開発」 平成 14

- 年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究所保護事業）報告書,211-236.
- 原田正文ほか(2004)「児童虐待発生要因の構造分析と地域における効果的予防法の開発」平成15年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究所保護事業）報告書,484-525.
- 藤田大輔・金岡緑（2002）「乳幼児をもつ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響」日本公衛誌第4号,305-312.
- 兵頭好美ほか（1998）「エイジングストレスサポートモデルによる高齢者の精神的健康に関する実証的研究」健康心理学研究,第11巻第1号,1-15.
- 金岡緑・藤田大輔（2002）「乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性」厚生指標第49巻第6号,22-30.
- 狩野裕（1997）「グラフィカル多変量解析—目で見る共分散構造分析—」現代数学社.
- 川井尚（1998）「育児不安と心の相談」生活教育42(4),26-30.
- 川井尚ほか（1999）「子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究」日本子ども家庭総合研究所紀要第36集,117-132.
- 川井尚ほか（2000）「子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成」日本子ども家庭総合研究所紀要第37集,159-170.
- 小林美智子(1993)「児童虐待の理解と対応」日本医師会雑誌,110（4）,556-563.
- 小林美智子(2002)「虐待発生の背景」周産期医学32（5）687-691.
- 松尾 太加志・中村 知靖（2002）「誰も教えてくれなかった因子分析—数式が絶対に出てこない因子分析入門」北大路書房.
- Milner,J.S(1994)*Assessing Physical Child Abuse Risk: The Child Abuse Potential Inventory*. Clinical Psychology Review,14(6),547-583.
- Munakata,T.(1982)*Psycho-Social Influence on Self-Care of The Hemodialysis Patient*. Social Science and Medicine,16(13),1253-1264.
- 中嶋和夫ほか（1999）「母親の育児負担感に関する尺度化」厚生指標第46巻26号,11-18
- 成田健一ほか（1995）「特性的自己効力感尺度の検討」教育心理学研究第43巻第3号,306-314.
- 大日向雅美（1992）「母性の研究」川島書店.
- 大原美知子（2002）「大都市一般人口における母親による児童虐待の実態—その2虐待行動と母性意識との関連」第22回日本社会精神医学会.
- 坂野雄二・東条光彦（1986）「一般性セルフエフィカシー尺度作成の試み」行動療法研究,第12巻第1号,73-82.
- 妹尾栄一（2002）「児童虐待の現況：調査結果から見える深刻な実態」子どもの虐待とネグレクト第4巻第2号,264-275.
- Schneewind,K.A(1995) Impact of family processes on control beliefs. Bandura,A.Ed, *Self-efficacy in changing societies*. New.York:Cambridge University Press,114-148.
- Steele, B(1980) *Psychodynamic factors in child abuse* ; Kempe H and Helfer R,eds.*The Battered Child 3ed*, The University of Chicago Press,49-85.
- 田中共子ほか（2002）「在宅介護者のソーシャルサポートネットワークの機能—家族・友人・近所・専門職に関する検討—」社会心理学研究第18巻第1号,39-50.
- 豊田秀樹編著（2003）「共分散構造分析[疑問編]—構造方程式モデリング」統計ライブラリー.

山野則子 (2002) 「子育てネットワーク」野田正人ほか編『子どもの権利と社会的子育て』信山社, 68-86.

山野則子 (2003) 「家族ライフサイクル危機理論モデルによる児童虐待事例の分析」平成 14 年度厚生労働科学研究 (子ども家庭総合研究所保護事業) 報告書.244-256.

資料

表 C-2-1 ①子育て仲間と育児負担感 10ヶ月

グループ統計量

親子で一緒に過ごす子育て仲間がいますか		N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
子育て困難	いる	734	1.7459	.46098	.01702
	いない	225	1.9300	.57574	.03838

表 C-2-1 ②子育て仲間と育児負担感 4ヶ月

グループ統計量

子育て仲間		N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
子育て困難	いる	591	1.6639	.48513	.01996
	いない	273	1.8054	.58509	.03541

表 C-2-2 ①子育てサークルと育児負担感 3歳

記述統計

子育て困難

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
現在参加している	188	1.9793	.52930	.03860	1.9031	2.0554	1.10	4.00
過去に参加したことがあが現在は参加していない	293	1.9154	.50301	.02939	1.8575	1.9732	1.00	4.10
参加したことはない	863	1.8645	.53566	.01823	1.8288	1.9003	1.00	4.50
合計	1344	1.8917	.52901	.01443	1.8634	1.9200	1.00	4.50

表 C-2-2 ②子育てサークルと育児負担感 1歳半

記述統計

子育て困難

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
現在参加している	181	1.7827	.52504	.03903	1.7057	1.8597	1.00	3.88
過去に参加したことがあが現在は参加していない	194	1.8205	.52368	.03760	1.7463	1.8946	1.00	4.50
参加したことはない	825	1.7171	.48415	.01686	1.6840	1.7502	1.00	4.40
合計	1200	1.7437	.49829	.01438	1.7155	1.7719	1.00	4.50

表 C-2-3 ①育児体験と育児負担感 3歳

記述統計

子育て困難

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
よくあった	231	1.8186	.47140	.03102	1.7575	1.8797	1.00	4.10
ときどきあった	399	1.8459	.50238	.02515	1.7964	1.8953	1.00	3.90
なかった	714	1.9409	.55609	.02081	1.9000	1.9818	1.00	4.50
合計	1344	1.8917	.52901	.01443	1.8634	1.9200	1.00	4.50

表 C-2-3 ②育児体験と育児負担感 1歳半

記述統計

子育て困難

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
よくあった	188	1.6290	.48620	.03546	1.5590	1.6989	1.00	4.50
ときどきあった	341	1.7031	.45398	.02458	1.6547	1.7514	1.00	4.40
なかった	671	1.7965	.51618	.01993	1.7574	1.8356	1.00	4.25
合計	1200	1.7437	.49829	.01438	1.7155	1.7719	1.00	4.50

表 C-2-3 ③育児体験と育児負担感 10ヶ月

記述統計

子育て困難

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
よくあった	165	1.6356	.43396	.03378	1.5689	1.7023	1.00	4.00
ときどきあった	281	1.7375	.47630	.02841	1.6816	1.7935	1.00	3.67
なかった	513	1.8666	.51107	.02256	1.8223	1.9110	1.00	4.13
合計	959	1.7891	.49618	.01602	1.7576	1.8205	1.00	4.13

表 C-2-3 ④育児体験と育児負担感 4ヶ月

記述統計

子育て困難

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
よくあった	162	1.5833	.45145	.03547	1.5133	1.6534	1.00	3.63
ときどきあった	261	1.6762	.45647	.02825	1.6206	1.7319	1.00	3.50
なかった	441	1.7738	.57214	.02724	1.7203	1.8274	1.00	4.13
合計	864	1.7086	.52262	.01778	1.6737	1.7435	1.00	4.13

表 C-2-4 ①早期教育と育児負担感 3歳

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					習い事なし	564		
習い事1つ	519	1.9060	.53215	.02336	1.8601	1.9519	1.00	4.50
習い事2つ	194	1.9649	.55131	.03958	1.8869	2.0430	1.00	4.30
習い事3つ	52	1.8981	.62355	.08647	1.7245	2.0717	1.00	3.70
習い事4つ	11	1.9364	.59544	.17953	1.5363	2.3364	1.00	2.80
習い事5つ	4	2.3750	.68496	.34248	1.2851	3.4649	1.40	3.00
合計	1344	1.8917	.52901	.01443	1.8634	1.9200	1.00	4.50

表 C-2-4 ②早期教育と育児負担感 1歳半

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					習い事なし	670		
習い事1つ	397	1.7844	.53775	.02699	1.7314	1.8375	1.00	4.40
習い事2つ	89	1.7112	.39002	.04134	1.6291	1.7934	1.00	3.10
習い事3つ	38	1.9309	.53006	.08599	1.7567	2.1051	1.10	3.33
習い事4つ	6	2.0417	.66964	.27338	1.3389	2.7444	1.40	3.28
合計	1200	1.7437	.49829	.01438	1.7155	1.7719	1.00	4.50

表 C-2-5 ①仕事と育児負担感 3歳

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					フルタイム	172		
パートタイム	201	1.8368	.48553	.03425	1.7693	1.9043	1.00	3.70
自営業	59	1.8966	.57505	.07486	1.7468	2.0465	1.00	4.10
内職	32	1.9813	.53003	.09370	1.7902	2.1723	1.00	3.00
いいえ	880	1.9174	.54460	.01836	1.8814	1.9534	1.00	4.50
合計	1344	1.8917	.52901	.01443	1.8634	1.9200	1.00	4.50

表 C-2-5 ②仕事と育児負担感 10ヶ月

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					フルタイム	88		
パートタイム	53	1.6997	.44663	.06135	1.5766	1.8228	1.08	3.04
自営業	25	1.7733	.62420	.12484	1.5157	2.0310	1.00	4.13
内職	14	1.7113	.49825	.13316	1.4236	1.9990	1.08	2.71
いいえ	779	1.8130	.49898	.01788	1.7779	1.8481	1.00	4.00
合計	959	1.7891	.49618	.01602	1.7576	1.8205	1.00	4.13

表 C-2-6 ①経済状況と育児負担感 3歳

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					安定している	541		
まあまあ暮らせる	621	1.8787	.49115	.01971	1.8400	1.9174	1.00	4.10
苦しい	182	2.0489	.68000	.05041	1.9494	2.1484	1.00	4.50
合計	1344	1.8917	.52901	.01443	1.8634	1.9200	1.00	4.50

表 C-2-6 ②経済状況と育児負担感 1歳半

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					安定している	474		
まあまあ暮らせる	551	1.7416	.48010	.02045	1.7014	1.7818	1.00	4.40
苦しい	175	1.8566	.56244	.04252	1.7727	1.9405	1.00	3.88
合計	1200	1.7437	.49829	.01438	1.7155	1.7719	1.00	4.50

表 C-2-6 ③経済状況と育児負担感 10ヶ月

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					安定している	383		
まあまあ暮らせる	432	1.8228	.50008	.02406	1.7755	1.8701	1.00	4.00
苦しい	144	1.8663	.57211	.04768	1.7721	1.9606	1.00	4.13
合計	959	1.7891	.49618	.01602	1.7576	1.8205	1.00	4.13

表 C-2-6 ④経済状況と育児負担感 4ヵ月

記述統計

子育て困難	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
					安定している	330		
まあまあ暮らせる	414	1.7074	.50948	.02504	1.6582	1.7566	1.00	3.88
苦しい	120	1.8250	.64075	.05849	1.7092	1.9408	1.00	4.13
合計	864	1.7086	.52262	.01778	1.6737	1.7435	1.00	4.13

表 C-3-1 育児体験と不適切な養育 1歳半

記述統計

不適切な	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
よくあった	188	2.1782	.64130	.04677	2.0859	2.2705	1.00	5.00
ときどきあった	341	2.2067	.60525	.03278	2.1423	2.2712	1.00	4.50
なかった	671	2.3007	.66260	.02558	2.2504	2.3509	1.00	4.50
合計	1200	2.2548	.64506	.01862	2.2183	2.2913	1.00	5.00

表 C-3-2 早期養育と不適切な養育 3歳

記述統計

不適切な	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
習い事なし	564	2.5822	.69801	.02939	2.5244	2.6399	1.00	4.67
習い事1つ	519	2.6172	.71654	.03145	2.5554	2.6790	1.00	5.00
習い事2つ	194	2.6031	.72219	.05185	2.5008	2.7054	1.00	4.67
習い事3つ	52	2.2436	.81611	.08544	2.0721	2.4151	1.33	3.67
習い事4つ	11	2.4848	.50252	.15152	2.1473	2.8224	1.67	3.33
習い事5つ	4	3.1667	.88192	.44096	1.7633	4.5700	2.00	4.00
合計	1344	2.5866	.70803	.01931	2.5487	2.6244	1.00	5.00

多重比較

従属変数: 不適切な
Tukey HSD

(I) 早期教育	(J) 早期教育	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
習い事なし	習い事1つ	-.0351	.04289	.964	-.1575	.0873
	習い事2つ	-.0209	.05868	.999	-.1884	.1465
	習い事3つ	.3386*	.10218	.012	.0469	.6302
	習い事4つ	.0973	.21465	.998	-.5153	.7099
	習い事5つ	-.5845	.35378	.564	-1.5941	.4251
習い事1つ	習い事なし	.0351	.04289	.964	-.0873	.1575
	習い事2つ	.0141	.05933	1.000	-.1552	.1834
	習い事3つ	.3736*	.10256	.004	.0809	.6663
	習い事4つ	.1324	.21483	.990	-.4807	.7454
	習い事5つ	-.5495	.35389	.630	-1.5594	.4605
習い事2つ	習い事なし	.0209	.05868	.999	-.1465	.1884
	習い事1つ	-.0141	.05933	1.000	-.1834	.1552
	習い事3つ	.3595*	.11010	.014	.0453	.6737
	習い事4つ	.1182	.21853	.994	-.5054	.7419
	習い事5つ	-.5636	.35615	.610	-1.5800	.4528
習い事3つ	習い事なし	-.3386*	.10218	.012	-.6302	-.0469
	習い事1つ	-.3736*	.10256	.004	-.6663	-.0809
	習い事2つ	-.3595*	.11010	.014	-.6737	-.0453
	習い事4つ	-.2413	.23399	.908	-.9090	.4265
	習い事5つ	-.9231	.36584	.118	-1.9671	.1210
習い事4つ	習い事なし	-.0973	.21465	.998	-.7099	.5153
	習い事1つ	-.1324	.21483	.990	-.7454	.4807
	習い事2つ	-.1182	.21853	.994	-.7419	.5054
	習い事3つ	.2413	.23399	.908	-.4265	.9090
	習い事5つ	-.6818	.41167	.561	-1.8567	.4930
習い事5つ	習い事なし	.5845	.35378	.564	-.4251	1.5941
	習い事1つ	.5495	.35389	.630	-.4605	1.5594
	習い事2つ	.5636	.35615	.610	-.4528	1.5800
	習い事3つ	.9231	.36584	.118	-.1210	1.9671
	習い事4つ	.6818	.41167	.561	-.4930	1.8567

*. 平均の差は .05 で有意

表C-3-3 仕事と不適切な養育の関連 3歳

記述統計

不適切な

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
フルタイム	172	2.4419	.61694	.04704	2.3490	2.5347	1.00	5.00
パートタイム	201	2.5456	.64485	.04548	2.4559	2.6353	1.33	4.33
自営業	59	2.5932	.66109	.08607	2.4209	2.7655	1.33	4.00
内職	32	2.8437	.68775	.12158	2.5958	3.0917	1.67	4.00
いいえ	880	2.6144	.73763	.02487	2.5656	2.6632	1.00	4.67
合計	1344	2.5866	.70803	.01931	2.5487	2.6244	1.00	5.00

多重比較

従属変数: 不適切な

Tukey HSD

(I) 仕事	(J) 仕事	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
フルタイム	パートタイム	-.1037	.07328	.618	-.3039	.0964
	自営業	-.1514	.10645	.614	-.4421	.1394
	内職	-.4019*	.13583	.026	-.7729	-.0309
	いいえ	-.1725*	.05882	.028	-.3332	-.0119
パートタイム	フルタイム	.1037	.07328	.618	-.0964	.3039
	自営業	-.0476	.10447	.991	-.3330	.2377
	内職	-.2981	.13428	.173	-.6649	.0687
	いいえ	-.0688	.05516	.724	-.2194	.0819
自営業	フルタイム	.1514	.10645	.614	-.1394	.4421
	パートタイム	.0476	.10447	.991	-.2377	.3330
	内職	-.2505	.15489	.486	-.6736	.1726
	いいえ	-.0212	.09488	.999	-.2803	.2380
内職	フルタイム	.4019*	.13583	.026	.0309	.7729
	パートタイム	.2981	.13428	.173	-.0687	.6649
	自営業	.2505	.15489	.486	-.1726	.6736
	いいえ	.2294	.12697	.370	-.1175	.5762
いいえ	フルタイム	.1725*	.05882	.028	.0119	.3332
	パートタイム	.0688	.05516	.724	-.0819	.2194
	自営業	.0212	.09488	.999	-.2380	.2803
	内職	-.2294	.12697	.370	-.5762	.1175

*. 平均の差は .05 で有意

表C-3-4 ①経済状況と不適切な養育の関連 3歳

記述統計

不適切な

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
安定している	541	2.5588	.71670	.03081	2.4983	2.6194	1.00	5.00
まあまあ暮らせる	621	2.5539	.66438	.02666	2.5016	2.6063	1.00	4.67
苦しい	182	2.7802	.79473	.05891	2.6640	2.8965	1.00	4.67
合計	1344	2.5866	.70803	.01931	2.5487	2.6244	1.00	5.00

多重比較

従属変数: 不適切な

Tukey HSD

(I) 経済状況	(J) 経済状況	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
安定している	まあまあ暮らせる	.0049	.04143	.992	-.0923	.1021
	苦しい	-.2214*	.06036	.001	-.3630	-.0798
まあまあ暮らせる	安定している	-.0049	.04143	.992	-.1021	.0923
	苦しい	-.2263*	.05937	.000	-.3656	-.0870
苦しい	安定している	.2214*	.06036	.001	.0798	.3630
	まあまあ暮らせる	.2263*	.05937	.000	.0870	.3656

*. 平均の差は .05 で有意

表C-3-4 ②経済状況と不適切な養育の関連 1歳半

記述統計

不適切な

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
安定している	474	2.1767	.60239	.02767	2.1223	2.2311	1.00	5.00
まあまあ暮らせる	551	2.2627	.63071	.02687	2.2099	2.3155	1.00	4.50
苦しい	175	2.4414	.75606	.05715	2.3286	2.5542	1.00	4.75
合計	1200	2.2548	.64506	.01862	2.2183	2.2913	1.00	5.00

多重比較

従属変数: 不適切な

Tukey HSD

(I) 経済状況	(J) 経済状況	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
安定している	まあまあ暮らせる	-.0860	.04008	.081	-.1801	.0080
	苦しい	-.2647*	.05659	.000	-.3975	-.1320
まあまあ暮らせる	安定している	.0860	.04008	.081	-.0080	.1801
	苦しい	-.1787*	.05551	.004	-.3090	-.0485
苦しい	安定している	.2647*	.05659	.000	.1320	.3975
	まあまあ暮らせる	.1787*	.05551	.004	.0485	.3090

*. 平均の差は .05 で有意

児童虐待発生要因の解明と児童虐待への
地域における予防的支援方法の開発に関する研究

（研究協力者報告書）

カナダの子育て支援および子ども虐待予防・再発防止への対策

研究協力者 兵庫県こころのケアセンター 酒井 佐枝子

研究要約

本報告は、カナダの社会状況を紹介し、子育て支援および子ども虐待予防・再発防止に関するシステムと現状を、関連文献、連邦政府・州政府の発行する関連資料、報告書を通して概観する。2001/2002年に提示された初期子ども期の発達の枠組みや各種子育て支援のためのプログラムなどの取り組みを紹介し、さらに子ども虐待防止・再発防止対策としてブリティッシュ・コロンビア州における通告以後の援助システムを整理し、具体的な再発予防のためのプログラムを紹介した。それらをもとに日本の支援活動の方向性を検討することを試みた結果、日本にすみやかに導入することが望ましいと考えられるカナダの実践は、以下3点にまとめることができた。

（1）虐待ケースに対する司法の積極的導入

行政機関もしくは裁判所により、親子分離の決定・治療プログラム受講命令などの法的措置がとられる。これにより子ども虐待が起きている家庭への援助が開始され、家庭の変化が期待できる。

（2）各家庭に対する援助計画の立案・進行管理における個別性の徹底

各家庭によって異なるニーズに応じた計画を立案することで、有益な援助を提供できる。

（3）豊富な目的別介入プログラムの導入

地域で実施されるニーズに応じた多くのプログラムが整備されることによって、家庭のニーズへの的確な対応ができる。

キーワード：子育て家庭への支援、子どものウェルビーイング、子ども虐待、教育介入プログラム

I はじめに

子ども保護に関するカナダの歴史的背景及び移民を積極的に受け入れる国として、その政策は人権に配慮したものといえる。政策は時代の流れと共に変化を見せており、現在の子育て支援のシステムへと見直され、初期子ども期の発達の枠組みが新たに提示されたのは2001/2002年である。通告義務や罰則規定など子ども虐待（以下、虐待と略す）に関する法律や具体的援助システムのあり方は、各州・準州政府によって若干の違いがみられる。ここではカナダでの連邦政府レベルにおけるシステムおよび各種プログラムを紹介し、続いて一つの州（ブリティッシュ・コロンビア州；以下BC州と略す）に限定して虐待予防・

再発防止活動を紹介する。BC 州は特にアジア系移民が多く移り住んでおり、東洋文化に対する理解も深い地域である。また子どもの保護や児童虐待に関する標準化された援助基準が整備されており、この分野に関する援助システムが充実していることから、BC 州を取り上げることとした。その上で、子ども虐待の予防・再発防止における支援に必要な視点を提示する。

II カナダの特徴

カナダの人口は、日本の 27 倍の国土の広さとは対照的に、日本の 4 分の 1 の約 3200 万人（2004 年 6 月現在）で、そのうち 19 歳以下の人口は、全人口の 24.6%（約 785 万人）である。ただし州によって子どもの保護に関する対象年齢の上限年齢は異なっている。

カナダは世界各国からの移民を積極的に受け入れる政策を取っており、年間約 2 万 5 千人の外国からの人々を受け入れることを認めている。現在カナダ全土では約 540 万人⁽¹⁾の移民が生活をしており、多文化で形成されるモザイク社会を構成している。このような中では異なる文化的な背景をもった人同士がいかに支えあいながら地域に根づいて生活をしていくかが大切となってくる。互いの文化や人権を尊重し、個人の自由と独立を重んじる姿勢は政府の掲げる政策にも反映され、少数者や弱者に対する支援の豊富さは学ぶべきところが多い⁽²⁾。これは子育て環境のシステム整備にもあらわれている。“一人で育児をこなすことほど孤独でストレスのたまることはない”という認識のもと、地域の様々なネットワーク網を積極的に利用するための日常的な支え合いを広く用意し、必要な時に社会的支援を求めることができる体制が整えられている。互助の必要性を一人一人がよく理解し、地域が子どもを育てるという姿勢に立って、孤立・ストレスを減らすための支援、そして子どものいる家庭そのものの機能を強化する支援が行なわれている。

もちろん、近年の世界的な経済不況はカナダの社会保障施策にも及び、子どもの保護に関してもその例外ではない。福祉財源の削減などの厳しい状況の中、家族のニーズを的確に捉え、それに応じていく必要もある。これまで行われてきた支援を見直し、子育て家庭のウェルビーイングに必要なシステムを模索した結果、IIIで述べる指針が提示された。

III 子育て家庭への支援

1. 国を挙げての指針

虐待の予防システムを検討する前に、カナダでの子育て家庭への取り組みを概観しておく必要がある。虐待の発見および援助の開始は、子育て家庭への支援とは切っても切れない関係にあるからである。

カナダのすべての子どもが健康に充実感を伴ったそして社会に貢献できる一員として成長するための潜在的可能性を十分に発揮できる機会を最大限に保障するための国の計画が提示された。子どもに関する国家的指針（National Children's Agenda）⁽³⁾は、連邦政府および州・準州政府との協同事業により 1997 年に提案、1999 年にカナダ国民の声を取り入れた上で修正が加えられた。これはカナダ全土にまたがる、子どもの未来についての共通認識が凝縮されたものといえる。子どもの発達への援助は保健、社会サービス、法的、教育など各領域での実践はすでに行われている。しかし支援網から洩れる、あるいは経済効率の問題など縦割りの支援だけでは十全に機能しない部分もあることから、多領域にまたがる支援を統括することで、より手厚いサポートを実現できると考えられた。このような社会政策の再編としてこの指針が策定され、サービスやプログラムの充実のための予算を提供する道筋が新たに立てられた。これは長期的視点に立った道筋を提示するものであ

り、連邦政府のみならず州・準州政府の子育て家庭への支援事業について共通認識を維持するための指針となっている。

この指針は、子どもの発達に影響する5つの鍵となる環境；生物学的・遺伝的環境、家族環境、保育（child care）と学校環境、身体的・コミュニティー環境、そして社会環境を提示している。これらすべての環境において、子どもの成長への影響を考慮した政策が期待される。ここでは代表的な政策をいくつか紹介する。

① 初期子ども期の発達に関する取り決め **Early childhood development agreement**⁽⁴⁾⁽⁵⁾ (6)

指針の中でも最も強調されているのは、子ども期の特に誕生からの数年間の発達の重要性である。この初期子ども期を充実したものとして過ごせるかどうか、その個人の後々の人生のウェルビーイングの決定因子となることが各種の研究により明らかとなった⁽⁷⁾。そこで連邦政府は州・準州政府との合意の元、新たな初期子ども期の発達をサポートする動きを見せた。そして初期子ども期からその発達を促進するような働きかけを国を挙げて行うことが優先事項として確認されたのが2000年9月に公表された取り決めである。これを元にカナダ連邦政府は、カナダにおける家族とその子どもたちを援助することを目的に、2001/2002年から5年間かけて、州・準州政府に対して22億ドルを投じた【初期子ども期の発達の枠組み】⁽⁸⁾を実行することに決めた。主に以下の4分野における活動に投じられている。

- A) 健康な妊娠期・出産・幼少期を促進すること
- B) ペアレンティングや家族サポートの改善
- C) 初期子ども期の発達・学習とケアの強化
- D) 地域サポートを強化すること

これらの分野の中ですでに提供されている援助やサービスを充実させ、また新たに必要な援助を提供するための資金として利用されている。これらの充実によって、子育て家族は多くの情報やプログラムへのよりよいアクセスを得ることとなった。

② 就学前学習と保育への多角的な枠組み **Multilateral Framework on Early Learning and child care**

2003年に連邦政府、州・準州政府との間で社会サービスに関する合意が得られ、就学前児童の学習及び託児への援助に9億ドル（5年間）が給付されることとなった。資金の使用目的は、プログラムやサービスを立ち上げるための元手や活動資金、受講料補助金、親への情報やリファー先の提供だけでなく、援助職の賃金上昇やトレーニングのためにも使用される。例えば援助職としての発達を支援することや質の確保なども含まれている。

③ 国家の児童手当 **National child benefit**⁽⁹⁾

子どもの貧困の減少および親の再就労のサポート、政府の政策の重複を避けることを目的に設立された。子どものいる低収入家庭への給付と、各州・準州における各家庭のニーズに応じた給付金・サービスへの資金的な援助という2つの主要な援助を行う。低・中収入家庭を対象にCanada Child Tax Benefitの制度として、カナダにおける子どものいる全家庭の82%（2001/2002）に給付金が支払われている。これらは子育て家庭における税優遇措置（最大21%）も含まれている。National child benefitはそれに加えて、さらに低収入家庭（子どものいるカナダの全家庭の40%）に補足金を給付している。